

ルノ飢エト耳鳴ノ持病 寒イ暗イ ナニモ見タクナイ 空仰ギ 溜息ツキ 目二ハ視エナイ裂ケメニ向ッテ イッサンニ ボク走ル

詩としてもつともわかりやすい作品がここに集つている。 集めよ

と意図したのではない が結果がそうなった。

ことである。 農や村にふ れた詩ばかりというのも、 章を編成してみて気付 いた

界的という日本の農や村の状況に当てはめたいと応じた者がいた。 明快な詩、 わかりやすい詩の背後は暗く深いのか。 と誰かが言ったら、 い やメ イカ イはむ しろ迷怪さ、

### 村の女

●浜川 弥

あさっての方向をむいた風景がある

大島も 小島も

この半島につらなるすべての

磯も 村も

海深く眠る 先祖の血を拒絶し

女は逃げることを諦める

高いコンクリートの壁の内がわを

奥志摩の誇大された宣伝が

山をえぐり取り 鼻唄を歌い

舗装された帯の上を走る

ぎらぎらとかがやく海が 夕暮が 見えない

頑強な堤防に

太陽は押しつぶされ

暗闇のなかに追いつめられ 疲れはて

空も 村も 裏返えり

はいあがることのない 底に

いつのまにか窓をうしなった村が沈んでいる

半島はふところいっぱいに真珠を含んで

外洋の荒波を諸に受け止める

四国 九州 奄美までも

漁場を追い続けた 海やけした元気な親父たち

はなやかな娘たちの笑い声が

澄んだ海 澄んだ空

湾いっぱいに広がる

この国の あれは

あれは 過去であったのか

未来であるのか

組合数 百五十

借入金 十三億

村の三割が家 屋敷抵当

返済するあてなし

アナタタチハ何ヲトロウトユウノデスカ

タスケテクレルトユウノデスカ

サア 村ノ三割ヲコノ暗イ底カラ

ヒキ上ゲテクダサイ ドコヘデモ

ソシタラ喜コンデ家モ屋敷モアナタニサシアゲマス

軒先きの民宿のカンバンは 青ざめ

今日 昼間

コンビナートの街から追われた

261

男が釣糸を垂らす 底に

二月 アワビ サザエの残骸が 解禁をまたず七割まで死滅した

いつのまにかいなくなった亭主の顔と重り

女の

目やにの奥に沈んで行く

男に逃げられ

不感症になった 女の 陰部に

何が生れ 何が育つというのか

ただ 海にかえることの出きない執念が

暗闇の底から

ピィッと するどく 磯笛ならし

頭上を走る 東京 大阪 名古屋

テイルに光るナンバーに目を光らせ

必死に生きている 砂の女

(筆者は三重県在住・半農半漁詩人)

#### 山本 幸男

どさっと音がして

赤土の壁が崩れた

すると

そこから錆びた手鏡がころがり出たのだ 朽ちた棺の脇板が落ちて

おととい癌で死んだ農夫の

墓穴を掘っていた

錆びた手鏡は

そのおとこの若死した女房の棺から出

まぶしすぎる

十年の風景を宿した

戒律を破った 「棺の中へくさらぬものは入れられん」という

若い女房への愛がしのばれて いま埋めようとする貧しいおとこの

行年二十三才 せつなかった

マビキがその女の死因であっ た

竹筒に米を入れて枕上でふった 熱い陽の下で時間は逆流し

闇の時間があった

○○妻とあるだけで

墓石に名前はなかった 小さな谷間の集落に

エナを引き千切った血まみれの女の

弛緩した時間であった

マビキ

それは菜っ葉の間引きではない

# 秋のこと

#### ■草階 俊雄

無精ひげの男 食事している男 たぎり箸で口にいれる にぎり箸で口にいれる

秋の地面は白いむこうに見える街道むこうに見える街道

侍がころされた田舎町に 美女がうばわれ

よみがえった静かさ

上空何万メートルまで空気はすみきっている? 重たい屋根をかぶった家々わらじ作りは 足の拇指をつかい 合掌した手をすりうごかしワラをなう

ただそれだけのことべつに

#### ■大崎 弟

ぼくはそれらがすきであった よどんだかわのにおい

天日に干したはらわたをえぐりだし、みちばたいちめ目のあかいあぢの背をわりひとびとはすばやく

二のうでにほりもののある老香具師やいつもないているかかんだかくわらっているいのもないているかかんだかくわらっているのでである。 一切のでは、一切のでは、一切のでは、一切のでは、一切のでは、一切のでは、 このうでにほりもののある老香具師や

まずしくやかましくたつきしていたねこいらずをのんだ左官の女房などが駅まで用便にゆくつましい一家や

たくましくぎょうこしたまちであった はらわたとありゅうさんがすのなかに はえと

ひとびとのきせつであったいのちのままにうちつけていきる露出したいのちを

[一九六九]

高気圧がは

りだし

#### めいあん

■奥田 和代

耕う ほんまにひきあわ ひきあわ 毎日一升の麦とぬかを食って べっ 万円あまりのこうせんで売れた日 ん機のおかげで一年間ねそべっ 天 屋敷をどうしよう。 井裏にネスミの怪物が住んでいた んぞ飼うまいと父と母が相談 リギリ たこの空気はどうしよう。 の時代から P いた牛が

ひとつある。 あんが

牛の このまやをガレ てつまらない ジにしてやろう

・ラッ

い夢をいっぱいつみこんで ンととび込んでやろう

大きな音を聞い

さんたちが

来れば しめ たも

あたりい いとび散った

の破片をあんたにもわけてあげよう。

# 或る村の池

### ■山本 耕一路

老人だけがのこされていた村の若者らは都会に出てしまい

その老人も薄暗い家の柱や壁や

古い家そのものとなっていたふる箪笥の翳の在り場となり

廃墟じみた家がこの聚落の真ン中に溜池があり

池は村と生い立ち(なぜか唇の形をしていた溜池を囲い隠すように立ち並んでいた)

風に乗り家の雨戸やキツネ色の障子を異様な呻きをあげては

ぱくぱく波を顫わせていた狂気のように揺すり唇のような池を弾ずましては

便箋や為替やお紙幣や封筒をときにはさりげない風が不意に来て

こすりあげる遠い音を風の中へ

手品のように混ぜこみ

池の周囲から数戸の家の外周にかけて

水紋模様の輪を拡げていた

ここを訪れる村の老人慰問委員さんも

郵便配達さんも 村長さんも

この界隈だけに波打つ

おびただしい水紋模様の輪を

それぞれからだに巻きとっていた

然し 不思議なことに

この村からの二つの道はいずれも

螺旋に外へ伸びており

くるくると廻る

村を訪れ帰る者は誰

れも

くねった道を

廻るから からだに絡んだ輪が半分と戻らぬうち

269

自分に嫌悪さえ感じるわ

あなたは今

持ってかえる相手がいないわね

### ■池地 アヤ子

唐きびを買った

風のなかで

いますぐたべたらおいし いよ

太宰は親が先っていったでしょ

などではない

多分に病的なボセイホンノウ それだけよ

ぜんぶんたかいのね 一本二百円也

それは 郷愁を買ったもののようだった わたしはだめだわ・・・・・ 持ってかえらないの? でも わたしのは

> その頃の唐きびはわたしの背よりも高く そうした情熱をもった時代があった かつてこどもに 思った

どこまででも送ってやったかもしれない

以前のわたしだったら

と 友をからかったわたしは それとも東京まで送る?

庭先で はたはたと風に鳴った

まるで生きもののようなキイッ もぎとる時の

チンピラドロボーが という音

サーッと姿をかくした唐きびの林の中 唐きびの叫びにおどろいて

太陽をもぎとるような手ごたえをぬすみにきたのだ

あの子は

それを こどもたちに伝えることができなかったのか なぜわたしは

風が吹く それは季節はずれの唐きびの姿をしていた わたしの郷愁であった わたしの買ったものは はだか電球の露店で

こどもたちは すっかりさめてしまっているだろう唐きび わたしの手のなかで なんだこんなもの」

だけど やっぱり持ってかえるわ いうかもしれない

終電車よ

■山野 すみれ

何十年かに一度おとずれる

この不吉な花ざかりを

ささの実は神様のくだされたものだと ささに花の咲く年は凶作のしるし 私をうずめ心の中まであふれていた

この青みをふくむ黄色な花は 咲きこぼれる花の中に私はいた

野をおおうようにボタン雪が降った

細くみじかく手の中にかくれるような ようやく本葉二枚の除紙期をむかえる 小さな苗に冷たい雨が降りつづく 五日待ち十日おくれて

いたわるようにいねをうえた どろにまみれ腰をしびらせて ただ何も考えずに 苗をうえた

私の中にあなたの中にも咲きあふれる 小さな島にもりあがって咲きこぼれる この青さをふくむ不吉な花は この青く小さなきらきら花 山あふれ野を流し

ささの実しかもたぬ貧しい神が 気候の変化とは知りながらも わずかな細い実を残して枯死するささ

村の年寄達は声をひそめて語り合う

支配する年は何か心もとなく淋しい

高知市·開花期12集  $\widehat{72}$ 10

273

〈三重詩人〉

No. 78

いらだちを感じ乍ら祈るように播種した日も

幾夜湯につけても芽ぐまぬもみに 春になって幾日も雪が降った

剝がれた壁に

錆びた鎌が ひかっている。

ある。 耕うん機も 黙りこくって 片隅に

ころがっている。 何かを待つように 掘り起こされたじゃがいもが

だが。

誰もいない。

十月の XIJ 入れ の為の用具はことごとく

揃っている。

だが。

誰も来ない。

私もいない。

指は割れて 新しく張りめぐらされた蜘蛛の巣を つつくと

馴れぬ風が突いてくる。

ぼやけた空気を透かすと

遠くないところを

にじり寄ってくる電車が みえる。

電流のようなひびきが

地に洩れ始めた

枯れかけた花をつけた

その丈高い草の名前が

億い出せないのだ

〈ビンニラ〉2号(69・10)

# そら「亡き父の記」

叶一輝

「ひろしい そらみせてくれやあ」

顔を覆ったござ引き上げるまぶしい田んぼ道に止まってまぶしい田んぼ道に止まってりたカリヤカーに引かれて

ようみたか ほら もういくぞ

拭いても拭いてもとれない血へどは

276

# 「ひろしい かわみせてくれやあ」

田のあぜへ染み透ってゆく黒い水雑草に射す陽が雑草に射す陽が

ようみたか ほら もういくぞ

吐き出す息もくさっている 関ざしたまぶたの上まで はい回る

## ひろしい.....

でざのヘリをつかんでいる 包丁を握って母の首に押しつけた 枯枝のような父の腕が はせの木の葉

# 病気のせいで したんだんがのう」

アルマイトの洗面器が音をたてるリヤカーにつれている

「ひろしい そらみせてくれやあ」

叔父

母

父

祖母のつぶやき

空の果てで光る でんだんと遠ざかってゆく サナトリウムの白い壁が

「ひろしい もういいろう」

粘土のような顔にござかけて まぶしい田んぽ道をギイギイと リヤカー引いて ぼろぼろの体が

「ひろしい そらはまぶしいなあ」

「峰火」第四号(47·7)